

私は、これまでに農村計画と都市計画の両方に関わってきました。しかし、このふたつは、イギリスの「都市・農村計画(Town and Country Planning)」やドイツの「ラントシャフツプラン(Landschaftsplan)」のように、本来、一体的に扱われるべきものです。しかしながら、わが国では行政上の所管官庁の違いなどから2つに分かれてしまっているのが残念です。都市計画の側からも、大気循環システム(風の道、ヒートアイランド、大気浄化等)や水系の

大勢参加していて、地域計画を扱う上で好ましい形態になっています。かつて、日本学術会議では、農村計画学会と都市計画学会が共同でシンポジウムを開いていましたが、学術会議の機構改革後はなくなっていました。生態学的な土地利用の考えは、農村地域を含めることで生きてくると思います。今後、再び農村計画学会と都市計画学会の共同する場面ができることを望みます。

土地利用と土地自然との関係については、本

緑のエッセイ



●プロフィール

昭和11年9月9日 東京都出身
 昭和38年 東京大学大学院生物系研究科修士課程修了
 昭和40年 日本都市計画学会石川賞
 昭和47年 日本造園学会賞
 昭和59年 東京大学農学部教授
 平成3年 日本公園緑地協会北村賞
 平成5年 国際芝草学会1985-1989の国際貢献表彰
 平成9年 東京大学名誉教授
 平成13年 日本都市計画学会功績賞
 平成26年 みどりの学術賞

ないことが多く、結果として土地利用を強引に進めて自然破壊を引き起こすことにつながってしまっています。

一方、土地自然の側から土地利用を見る場合、人為の圧力に弱い自然や自然度の高い自然、貴重な生物の生息空間、生物多様性の高い自然、さらに農林業的生産性の高い空間や防災的に危険な土地は優先的に確保され、その他の土地自然の場所で構造物を造るべきだという発想になります。

実は農書を見ると、江戸時代の中期までは常

整備・保全・親水、生物環境保全システム(生き物の道、パークシステム等)などが関心をもたれています。農村計画と都市計画を併せた広域計画がもっと重視されるようになり、農村の側から都市に対してもっと計画的な提案を積極的に進めるようになって欲しいと思います。

農村計画学会は、都市計画学会よりも30年ほど後発で、フィジカル・プランニング(空間計画)の実績こそ弱いものの、農村社会学や農業経済学などの社会科学、人文科学系の研究者が

来ふたつの立場があります。土地利用を行う側から土地自然を見るのか、土地自然の側から土地にふさわしい土地利用を考えるのか—この立場の違いによって、自然環境の扱われ方は全く違ってきます。

土地利用を優先して考える場合、まず考えるのは、土地利用がどのような土地自然で立地するのが好ましいかです。しかし、現実には経済的条件や交通条件などによって、必ずしも自然的条件には合わない場所に立地しなければなら

に土地利用の側から土地自然の側からの両面から地域を捉えていたことがわかります。ところが江戸中期以降、経済的な効率が優先して考えられるようになり、土地利用を優先した考え方が優勢となつていきます。

自然を保全すべき場所を先に押さえていく発想がなければ、人為に対して弱い土地自然は失われていきます。もう一度、土地自然と土地利用を両面から考えることを習慣として復活させて欲しいと思います。